

乗って楽しい

SIGHT YAMAGUCHI 特集 復活から30年を越えた「貴婦人」と沿線の魅力

降りても楽しい

SL「やまぐち」号。

全国で初めてSL「やまぐち」号が山口線に復活してはや31年。その人気は全国各地、幅広い年代層に及んでいます。新幹線駅の新山口から、湯田温泉、県都・山口、新たに市に加わった阿東地域あとうを経て、お隣の津和野町までを結ぶ山口線は、山口市の大動脈。汽笛を鳴らし、白煙をあげながら走るSL「やまぐち」号の魅力を、バラエティに富んだ沿線と合わせて探ってみました。

2007年7月、阿東町地福（現・山口市阿東地福）にて。
津和野方面に向かうSL「やまぐち」号（C571）。

「石炭をば 早や積み果てつ」

（森嶋外著「舞姫」より）

S「やまぐち」号が出発を待つ新山口駅一番ホームに立つと、明治の文豪がその処女作の冒頭に記した一文が思い起こされる。現代にあつては忘れられがちな「石炭」というエネルギー源が、ここでは鷗外の時代と同様の大きな責任と期待を担っているからだ。

国鉄（当時）の近代化・合理化に伴って昭和四十年代に全国的に廃止された蒸気機関車（SL）は、ファンや地元からの熱い声に応え、一九七九（昭和五十四）年八月一日、山口線に復活した。

それから早や三十一年。優美なイメージから「貴婦人」とも呼ばれるC571・SL「やまぐち」号は、この間、変わらぬ人気を誇ってきた。運行日には全国から乗客が

集まり、沿線にはカメラを構えたファンたちの姿が絶えない。

ポッポー。汽笛と共に新山口を発車した「やまぐち」号は、樫野川沿い

や住宅街を走り抜け、名湯・湯田温泉、史跡が点在する山口などを経て、ぐんぐん山道に入る。

仁保からは木々に手が届きそうな中、上り坂での踏ん張りを感じさせながら田代トンネルを抜け、給水塔の残る篠目へ。続いて名勝・長門峡を過ぎ、りんご園や米どころ・阿東の平野の中を突き進み、終点は、小京都にして鷗外の故郷津和野だ。

運行中、窓の外の風景は紙芝居のごとく一転二転し、さまざまな表情を併せ持った山口市の広さ、深さも感じられて、見飽きない。

そして、それぞれ趣の異なるほどの客車に座つても、シュッシュッ、ポツポツというSLならではのリズムミカルな音と心地よい揺れに包まれ、ここだけが異空間、あたかもタイムスリップしたかのような感覚にとらわれる。

煤煙の匂いにも郷愁をそそられ、非日常感が味わる六十二・九km、約二時間の旅。季節の色に染まった車窓からの風景と共に、心ゆくまで楽しみたい。